

～焼け野原でも決してあきらめなかったお医者さん～



ながい たかし 永井 隆

自身も重傷を負いながら、科学者の冷静な眼と医師の使命感をもって、長崎の医療崩壊を食い止めた復興の立役者。

📖 4コマまんが

🕒 タイムライン

🎬 エピソード

🔍 もっとしりたい

📖 4コマまんが

じぶん 自分よりみんなのために

救護班結成

1945年8月、焼け野原に立ち上がる



不眠不休の手当て

薬も設備にない市民を救続ける



救護班結成

1945年8月、焼け野原に立ち上がる



如己堂から届ける希望

病床からも、医療と平和の灯を灯し続けた



🕒 タイムライン

ながさきいりょうふっこう 長崎医療復興ものがたり

1945年8月9日
(原爆投下)

原爆投下

長崎医科大学のレントゲン室で分析していた、その瞬間、すさまじい光と爆風が先生を襲います。右側の頭から血が噴き出す大けがを負いましたが、先生は自分の傷を包帯で縛ると、すぐに燃え盛る建物から、動けない患者さんや学生たちを外へ運び出しました。

8月10日
(次の日)

夜通しの救護

大学の校庭（焼け野原）の周りは真っ暗で、助けを求める声が響いていました。薬も包帯もほとんどありません。わずかに残った油をランプに注ぎ、その小さな明かりを頼りに、夜通しで何百人ものケガ人の手当を続けました。

8月10日
(2日後)

臨時の病院をつくる

長崎市・三ツ山地区では爆心地から逃げてきた人たちが、山のふもとに次々とやってきていました。先生はふらふらになりながらも、「救護班（きゅうごはん）」というチームを作り、山を越えて村へ向かいました。そこに旗を立て、「病院が壊されたなら、自分たちが病院になればいい」と臨時の病院を作って、村の人たちと一緒にみんなを助けました。

10月

原因発見

なぜ髪が抜け、熱が出るのか、誰も理由がわからず怖がっていました。放射線の専門家だった先生は、顕微鏡（けんびきょう）でみんなの血を調べ、これが「原子爆弾」による放射能のせいだと突き止めました。怖がるだけでなく、科学の力で正体を知ること、どうやって治せばいいかのヒントを世界に示したのです。

1946年
(1年後)

青空教室

大学はボロボロでしたが、お医者さんを目指す学生たちが戻ってきました。先生は、雪が降るような寒い日も、窓もない教室で講義をしました。体が弱って動けなくなってからは、自分の小さな部屋（如己堂）に学生を呼び、ベッドの上から「これからの長崎を救うお医者さんになってくれ」と教え続けました。

🎬 エピソード

じぶん かんじゃ いのち 自分よりも患者さんの命

被爆した瞬間、永井先生の頭からは血が勢いよく噴き出していました。普通ならパニックになるところですが、先生は自分の傷口にサッと布を巻きつけただけで、そのまま動けなくなった患者さんを背負って外へ運び出しました。「私の体は後回しだ。今助けないと死んでしまう人が目の前にいる。」その強い意志が、多くの命を救いました。永井先生は43歳という若さで亡くなりましたが、その心は今も長崎の街に生きています。先生が命がけで守った大学や病院は、今では世界中から病気を治す方法を学びに来る場所になりました。「誰かのために、自分ができる精一杯のことをする」これが、永井隆先生が私たちに残してくれた、一番大切な「復興のバトン」です。

🔍 もっとしりたい

- ・ 永井隆 略歴 長崎市永井隆記念館
<https://nagaitakashi.nagasakipeace.jp/japanese/stories/8.html>
- ・ 原子爆弾救護報告書
<https://www.genken.nagasaki-u.ac.jp/abcenter/nagai/index.html>